
白雪姫

ayu

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白雪姫

【Nコード】

N0856R

【作者名】

ayu

【あらすじ】

狩人さん目線の白雪姫。

ストーリーはほほみなさんの知っているものと同じでしょう。

（前書き）

楽しんで頂ければ幸いです。

最初と最後にしか出てこない癖に良いところばかりもっていく王子が気に食わなくてこの作品を作りました。

「鏡よ鏡、この国で一番美しい人は誰だい？」

薄暗がりの部屋で、僕の主　女王は、鏡に問いかけていた。答えを返さぬ鏡に早く答えろと詰め寄るその様は、酷く滑稽。それとも、僕に聞こえていないだけなのうか。彼女にだけ聞こえる、鏡の声。ああ、なんて恐ろしい。

暗いこの部屋を照らすのは、融け消えてしまいそうな蠟燭の炎と、それを反射する鏡だけ。くつくつと小鍋が音を立てて異臭を放ち、フラスコや試験管からは細く長い煙が立ち上る。魔道書が山と積まれたこの部屋は、随分とおぞましい。

「なんですって。……あの、白雪が？」

この私よりも美しいと？　小さな小さな呟きが、彼女の唇を震わせていた。彼女は他の何よりも、世界の誰よりも自分が美しいと信じていた。なのに、それを脅かす者がごく近くに居る。きつとまた、命を奪うのだらう。いつもの事だ。自分よりも美しいものを探して、殺して、そうすることで脆く、貧相な自信をどうにか維持しようとする。ああ、全く。なんて愉快な人なのだらう。

でもね、駄目だよ。

白雪だけは駄目なんだ。

「狩人は居る？」

「はい、ここに居ります」

出来るだけ従順な仮面を被り、明朗な返事と共に彼女の足許に跪く。柔和な笑みを浮かべて見上げると、その人は今にも死んでしまいうようなほど蒼白な顔で僕に小さな箱を差し出した。

「これにあの子の……白雪の心臓を入れて持って来て頂戴。いつものように、今回もお願いね」

箱を受け取り、仰せのままにと頭を下げた。僕に断るなんて選択肢はない。だって僕は、この人に雇われているのだから。

「必ずや、白雪の心臓をお納めいたしましょう」

僕の言葉に、彼女はほつと息を吐いた。これでまた一番になれるだとか、これでまだ大丈夫だとか、大方そんな事を考えているのだろう。どうせ、そんなことしか考えていないのだ。この人は美しさに執着しすぎている。その心根が、すでに醜いと言うのに。

思いながら、僕はわずかに笑みを零した。

彼女に雇われた時から、僕は彼女の小さな飼い犬。言われるがままに動く、従順で穏やかな可愛いペット。だけど、見えないところでまで従順なペットを気取る必要なんてこれっぽっちもない訳で。別に、彼女に忠誠を誓った訳ではないのだ。結んだのは、雇用契約。情の通った忠誠なんてしてしまったら、息苦しくてたまらない。それに、愛しい白雪をそう簡単に殺めてたまるか。僕は心の中で呟いた。

楽しくなりそうだなあ、と僕は小さな箱を抱えて主の部屋を後にした。

1

「白雪様、白雪様」

作戦を実行するために可愛い姫君を連れてきたのは、城から離れた所にある花畑。楽しげに花を摘むその姿は、まるで天使か妖精か。美しい絹の黒髪に、白桃の頬。薔薇の唇は柔らかく弧を描く。時折小鳥たちと戯れ遊ぶその様は、どこか神秘的で、女神のようにも見える。

「なあに？」

紡がれる声は高く愛らしい鈴の音。

「……白雪様、どうかお逃げください」

声をひそめ、言葉を続ける。

「貴方は命を狙われているのです。この森の向こう、奥深くに小さな家があったはずです。取り敢えず今は、そちらに身を寄せるのです」

「……狙われている？ そんな、誰に？」

怯えたように、白雪は目を見開いた。けれど、彼女は僕を疑ったりはしない。ごく小さな、幼いときから一緒に居るのだ。いつも優しい城の使用人を疑うなんて、この優しいお姫様に出来るはずがない。ああ実に、無菌室育ちは扱いやすい。

「貴方の継母……女王にです。本当です。早く、お逃げ下さい」

懇願するように、白雪の足許に跪く。そして、ほろり。涙をひとつ零して見せる。演技だって大事な小道具だ。白雪は小さく頷き、僕の手をそつと握った。

「教えてくれてありがとう。でも、どうか、貴方もお気をつけて」
そう言って、僕の手の甲にひとつ口付をし、白雪は森の向こう側へ駆けて行った。

さて、と僕は立ち上がり、猪の心臓を入れた小箱を持って主の元へと帰る事にした。

「白雪姫の心臓です。どうぞ、お納めください」

主は恍惚とした表情で小さな箱を受けとった。白い頬をわずかに赤らめ、口元をわずかにほころばせた。ああ、けれど、やっぱりこっちも無菌室育ち。猪の心臓とも知らず、小箱をきゅっと胸に抱く。そして、「よくやってくれたね」と一言だけ言葉を残し、彼女は自室へと戻って行った。

さて、これで少しは時間稼ぎができるだろうか。あの鏡が本当に魔法の鏡であるなら、時間などできるはずはないのだけれど。とりあえず僕は主の後を追ひ、二、三日暇が欲しいとそう告げた。上機嫌のその人は二つ返事で了承。ほんと、扱いやすい人だ。せめて大

事に抱えているその箱の中身が本物かどうか確認をしてからにすれば良いのに。

僕は返事を貰ってすぐに城を後にした。色々と、やらねばならないことがある。早いとこ仕上げてしまわないといけなからね。

少し口角を上げ、僕は馬へと跨った。ああ、なんて素晴らしい。

誰かの過ちは僕にとつてのチャンス。存分に活用させていだきましよう、我が主殿。あなたのこの国は僕が譲り受け、きっと繁栄させましよう。

もちろん、可愛い白雪を妃に迎え入れてね。

？

「……小さな家、これのことかしら」

白雪は小さな家の小さな部屋を、小さな窓から覗き込んだが、中は暗く、よく見えない。けれど目を凝らして見てみると、誰か、人が暮らしているのだろうと感じさせるものが幾つも目に入った。しかしあらゆる物が散乱し過ぎており、本当に人が住んでいるのかどうが少々怪しい。汚れた皿が出しっぱなしになっているテーブルに、衣類が散乱している床。積りに積もった埃に、張り巡らされた蜘蛛の糸。

「……中、入っても大丈夫かしら」

扉に鍵は掛かっていなかった。そつと取っ手に手を掛けると、ギイ、と蝶番が鈍い音を立てる。

床に複数付いている足跡は、まだ新しい物のように見えた。日頃使っているであろう蝋燭立てや、食器類に埃は積もっていない。やはり、誰かここで暮らしているのだらう。

「椅子も食器も七人分。……でもどれも子ども用の大きさだわ」

もしかして御両親が居ないのかしら。思いながら、白雪はひとつ溜め息を吐いた。ここに住まわせてもらう事は出来るかもしれないが、この有様では暮らせない。せめて、少しくらい掃除はさせて貰

おう。

「ピツカピカにしてしましましょう！」

どんな人が暮らしているのかは知らないが、最低限人間らしい暮らしはさせてもらいたい。埃にまみれて暮すような真似だけはしたくないので、白雪は玄関先に置いてあった箒を手に取り、掃除を始める。その箒自体が、すっかり埃にまみれてしまっているのは、見なかった事にした。

2

「ドック、グランビー、スニージー、スリーピー、バッシュフル、ハッピー、ドーピー。皆、揃っているな？」

僕は小人たちの顔を一人ずつ見やり、名前を呼んだ。

ドックは眼鏡を拭きながら静かに頷き、グランビーは何が気に食わないのかふんと鼻を鳴らす。スニージーはくしゃみを、スリーピーは欠伸をひとつ。バッシュフルは恥ずかしそうに、ハッピーは楽しげに返事をし、ドーピーは何を思ってか舌を出す。僕の部下たちは皆個性的で、とても愉快だ。

「前にも話したと思うけど、今日から君たちの家で白雪をかくまっ
て欲しい。彼女の安全を確保し、何かあった際には相応しい対処を
頼む」

僕の言葉に小人たちは頷いた。僕は僕で、他にやらねばならない
事がある。こう言う時、優秀な部下たちが傍に居るのは心強い。

「それじゃあ、白雪を頼んだよ」

「　　こんなものかしらね」

白雪は綺麗になった部屋を眺め、満足そうに笑みを浮かべた。汚
れに汚れた食器も洗濯物も綺麗に洗い、埃まみれの部屋は箒で掃き、
雑巾がけ。棚の小物類など気になる所はまだまだあるが、取り敢え

ず人が暮らすのに十分な部屋にはなった。夕飯の用意もした。思いがけず、食材が多く揃っていたのだ。どういう訳か、一般人にはまだ貴重な砂糖までも！

新しい母様に言われてお料理を覚えなければ、こう言う時に役に立つものなのね、と白雪は満足そうにひとつ頷いた。そして、これできっとこの住人さんたちにも快く迎え入れて貰えるわ、と白雪は手を合わせる。

自分が不法侵入者になっている事など、白雪はお構いなしだ。ここで失せ物が出たら真っ先に疑われるだろうと言う事も有難迷惑で嫌われるかもという思考も働かない。何故なら白雪は、お姫様だから。

「ちょっと疲れたわ」

白雪は小さなベッドが七つ並ぶ寝室に行き、しばし休むことにした。

？

「……寝てる」

「寝ているね」

「随分と無防備な……」

「お姫様ってこういうものなのか？」

「人様のベッドをなんだと思っているんだ」

「疲れたんだよ、部屋ぴかぴかだもん。ご飯もあるし」

「それにしたって限度があるだろう」

すやすやと安らかに眠る白雪への想いをそれぞれ語り、小人たちは取り敢えず白雪を揺すり起こした。

「……んう」

白雪は小さな人たちに囲まれている事に驚き、目を見開いた。

「……あら？」

「おはよう、可愛いお嬢さん」

「あらまあ」

目が覚めたら、目の前には七人の小人たち。小柄で可愛らしい容姿なのに白いおひげがたつぷりとしたその様は、七人の子ども達を思い描いていた白雪には思いがけないものだった。

「子どもじゃなくて、小人だったのね」

その眩きに、小人たちはくすりと声を漏らした。

「ええ。人とは似て非なる者ですが、怖がらないで下さいね」

「部屋の掃除を有難う」

「男所帯だと掃除が億劫でね」

「どうやら食事の用意までしてくれていたようで」

「まともな食事は久しぶりでね」

「嬉しいね」

「ありがとう」

小人たちの言葉に驚きつつ、白雪は思わず口元をほころばせた。なんて優しそうな人達なのだろう。そう思うと、自然と笑みがこぼれる。

「貴方のお名前は？」

「ああ、私は白雪といいます」

につこり笑って、自己紹介。白雪は無事、この小さな家で暮らすのに同意を貰えた事にほっと胸を撫で下ろした。

3

「これは一体どういうことなの！」

小箱の心臓が白雪のものではなかった事に気がついた女王は、休暇からもどった僕にそう叫んだ。

「鏡が……鏡が、今一番美しい者は白雪だと、そう言ったわ。白雪が死んでなどいない事も、この心臓が猪のものである事も教えてくれた」

どうして私を騙すような真似をしたの？ そう言って、僕に詰め寄る。

「申し訳ございません。……ですが、白雪様は以前からお世話をしてきた、言わば妹のようなものなのです。この手で命を奪うなど、恐ろしくて……！」

なんて、そんな事少しも思ってたなどいないけれど、涙ながらに訴える。その僕の姿に、女王は苛々と眉間に皺を寄せた。そして、もう良い、と言い放った。

「もうお前になど頼まない。私自ら、あの子を無き者にしてくれるわ！」

まあ、精々頑張ってくれ。

こちらにも、全力で阻止させてもらうからね。

？

ある日、白雪は毒の櫛で髪を梳かれ意識を失った。小人たちは白雪の髪に刺さったままになっていく櫛を抜きとり、解毒剤を作り白雪に飲ませた。

またある日、美しい五色の腰ひもでこれでもかときつく締められ白雪は意識を失った。小人たちはその腰ひもを切り落とし、白雪に気付け薬を飲ませた。

聞けば、そのどちらも物売りの老婆から貰ったものだと言う。確かにその櫛も、五色の腰ひもとても美しかった。繊細な細工が施された櫛は、毒さえ塗られていなければ相当高い価値があっただろう。どこまでも細やかに編み込まれたその腰ひもは、誰もが思わず手を伸ばすだろう。

しかし、命を狙われていると言う事を理解しているにもかかわらず見知らぬ人を二度にも渡り家に招き入れるなんて、なんておろかな娘なのだろう。小人たちは半ば呆れたように白雪を見た。天真爛漫で、陽気。しかし警戒心の足りないこのお姫様は、やはり誰か、擁護してくれる人が傍にいないければ生活する事が出来ない人種なのだろう。

「じゃあ、白雪。仕事に行ってくるから留守は頼んだよ」

「くれぐれも、気をつけるんだよ」

「誰か来ても、絶対に顔を見せるんじゃないよ」

「家に上げるなんて、言語道断だよ」

「自分の安全を第一に」

「出来るだけ早く帰るようにするからね」

「本当に、気を付けるんだよ」

小人たちの言葉に、白雪は分かったわ、と笑顔で頷いた。

「皆も、気を付けて行ってらっしゃい。お仕事頑張つてね」

のんきそうな笑顔に不安になりながらも、小人たちは仕事へ向かうことにした。向かうは鉾山。鉾石、宝石類の発掘が本職だ。白雪の保護は、あくまでも副職。しかし本職よりも副職が大変というのはどういふ事なのだろう。また知らない人間を家に上げるのではないかと思うと、気が気でない。

小人たちはひとつ、深い溜め息を吐きながら仕事に向かうのだった。

4

「……行つたか」

老婆に化け、リングの入った籠を手に出かけて行く女王を影から見やり、僕は女王の部屋にこっそりと侵入した。白雪が生きていたと発覚したその日、僕はその場で解雇を言い渡された。しかし、住み慣れた城内。隠れて居られる場所くらい、いくらでも知っている。「……今回はちょっと、危ういかもしれないなあ」

彼女が作ったのは、とつぷりと毒の染み込んだ真っ赤なリング。禍々しい呪いをその身に湛えた、毒リング。瑞々しく甘いその果実は、どこか人工的な輝きを持っていた。

一口かじれば命を落とす。

そんな呟きを聞いてしまえば、もう居ても立っても居られない。どうにかしてその解毒法を探さなければ。あの小人たちは医術には

長けてはいる。しかし、魔法や呪いの類まで解く事は出来ないだろう。

「ま、精々頑張りますか」

言葉の端に浮かれた気持ちに滲ませながら、手近な書物から開いていく。これだけの書物が揃っているのだから、解毒法を記したものだっただろう。いや、あの小心者の彼女の事だ、必ずどこかにあるはずだ。

思いながら、僕はただひたすらに書物の頁をめくり続けた。

？

「白雪、白雪！」

小人たちは床に倒れ伏す白雪に駆け寄った。傍には、一口だけかじられた赤い果実。一瞬、またか、などと思ってしまったが、それは本人には内緒にしておこう。

しかし、あの木の陰でこちらの様子を窺っている女は何者か。まあ、おそらくあれがこのお姫様の継母なのだろうと小人たちのまとめ役であるドックは鋭く目を細めた。そして、他の小人たちに早口で指示をだす。

「脈、呼吸共に正常だ。グランピー、スニージーは毒の成分検査。スリーピー、バッシュフルは白雪の血液検査。体内の毒の濃度も同時に調べてくれ。ハッピーは上に状況報告。それと毒の成分が分かり次第解毒剤の調合を頼む。ドーピーは一緒に犯人追跡。いくぞ」
存分にストレスを発散しなければ。いざ行かん、魔女退治。

ドックはドーピーを引き連れ、今まさに逃げて行こうとする女を追った。不可抗力とはいえしばらく一緒に暮らしていた少女が襲われたのだ。多少なりとも腹は立つ。

「……全く、どうやら情が移ってしまったようだね。厄介だけど」
呟きながら、ドックとドーピーは小さな体を最大限に生かしつつ尾行を続ける。可能であれば捕まえてしまおう。その言葉に、ドー

ピーは少しくらいならお仕置きも許されるよね、などと笑って見せる。語尾に『マークでも付きそうなその口調に、ドックは存分にやっておくれと微笑んだ。

「おい、このリンゴ、毒の成分でねえぞ！」

「こっちもだ！ 血液からも頭髮からも反応でない！」

「どうなってるんだ！」

「報告行つて来たよ！ すぐこっち向かってくれるって！」

「おい、呼吸浅くなってる！」

「脈拍もだ！」

医療班は思いがけない事態に酷く焦っていた。今までが少々お粗末なやり方だったため甘く見ていた。向こうもついに本気をだしたと言ふ事か。今のままでは本当に命が危ない。

「ちっ」

ひとつ舌打ちをして、グランビーは自分の主の顔を想い浮かべた。

「あの馬鹿、早く来い！」

5

「やあ、皆。白雪はどんな様子だい？」

白雪の様子がおかしいと連絡が来てから二日後、僕は小人たちの元を訪れた。ちなみに、昨日の段階で白雪が心停止した事が告げられている。

白雪はというと、美しい硝子の棺の中で静かに横たわっていた。

「ああ、ようこそ薄情者」

「ひきょう者が来た」

「うわ、笑ってやがる」

「どの面下げてここまで来たんだ？」

「何が愛しのお姫様、だ」

「連絡したんだからさっさと来いよ」

「一回死んでこい」

清々しい笑顔を浮かべ、汗ひとつ掻かず、呼吸の乱れも一切ない。確かにそんな状況で出てきたらそういう反応になっても仕方がないだろう。けれど僕はその小人たちの悪口雑言に、くすりとひとつ笑って見せた。

「そんな言い方しなくても良いだろう？　今回は毒じゃなくて呪いだったんだ。僕はずっと、その呪いの解き方を調べていたんだから僕のエレナ　あの魔女はもう牢に入れてある。おそらく、近いうちに処刑されることとなるだろう。しかし、僕の元へ送り届けられた時にはもうすっかり憔悴しきっており、「ごめんなさいごめんなさい……」とひたすら何かに謝り続けていた。外傷はないことから拷問を受けたという訳ではなさそうだったが、何か精神的にとっても厳しい事が行われたのだろう。

「それで、その呪いの解き方っていうのは？」

その問いに、僕はふふと思わず声を漏らした。

「何やら、『初めて愛した者の口付』で解けるらしいよ」

ロマンチックな呪いだよね、と言葉を続けると、小人たちはどこか呆れたような表情をした。

「お前、自分がこの姫様の初恋の相手だって信じてるのか？」

「随分と自信满满だね」

「これで勘違いだったら笑いものだぞ？」

その言葉達に、僕は大丈夫だよ、と返した。

「白雪の初恋は僕だよ。小さなときから見ているからね、そのくらいは分かっているよ。まあ、絆された僕も僕だけだよ」

上機嫌でそう言うと、小人たちからはまた非難の声が上がる。

「小さなとき、から……？」

「……小児性愛者、だったのか？」

「お前、人としてそれはどうだろう」

随分と言うようになったね、と僕は小人たちの頭を撫で回した。

嫌々と逃げ回る様はさながら懐かない猫のようで、からかって遊ぶには丁度いい。

「ああもう、良いから早く白雪を助けてやれ！　これでお前の目論みは完成するんだろ？」

そうだった、早く起こしてあげないとね。

「そうだね。じゃあ、遠慮なく頂きます」

白雪を覆う硝子を外し、死してもなお赤く色付いた小さな唇に口付をした。ああこれで、僕の悲願も達成だ。

「ん」

わずかに、唇が動く。長い睫毛が揺れ、オニキスの瞳が僕を見た。ああ、なんて素敵な、なんて美しい呪いを置いて行ってくれたのだろうか。僕は心の中であの魔女に感謝した。

「……狩人、さん？」

微笑み、白雪の頬をそつと撫でる。

「ええ。そして、隣国の第三王子でもあります」

その言葉に白雪は目を見開いた。そして、貴方が助けてくれたのね、と口元をほころばせた。

「女王は……あの魔女はもう居ません。貴方はもう自由です」

「……よかった」

安心したように呟いて、白雪は僕に手を伸ばした。細く、白い腕を取って抱き上げると、白雪は恥ずかしそうに頬を染め、はにかむように微笑んだ。

「本当に、ありがとう。小人さんたちも、ありがとう」

白雪の言葉に小人たちも微笑んだ。

？

かくして、僕はこの国の王となり、白雪を妃として迎え入れた。隣国の第三王子で王位継承権を持たない僕が、ひとつの国の主となったのだ！

国自体が大分傾いているからあまり贅沢は出来ないし、国の再建という所からのスタートとなるため、しばらくは忙しいだろうが、それはそれで本望だ。僕は自分の国が欲しかった。ずっと求め続けていた国土と可愛い妃が同時に手に入ったのだ。なんて幸運！

さあ、今まで以上に頑張らなければいけないね。

国の再建にあたり、まずはあの魔女の息のかかった城の使用人たちを解雇。そして小人たちに爵位を与え、城内で大臣として働いてもらう事にした。

ああ、なんて充実した日々だろう！

僕は今、最高にしあわせだ！

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0856r/>

白雪姫

2011年5月31日12時13分発行